

Title	廣松渉の思想と実践(上) - 戦後日本における学生運動の軌跡をたどって -
Author(s)	渡辺, 恭彦
Citation	文明構造論 : 京都大学大学院人間・環境学研究科現代文明論講座文明構造論分野論集 (2010), 6: 79-106
Issue Date	2010-09-07
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2433/126709">http://hdl.handle.net/2433/126709</a>
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

## 廣松渉の思想と実践（上） —戦後日本における学生運動の軌跡をたどって—

渡 辺 恭 彦

はじめに

1. 学生運動の活動家としての出発
2. 『日本の学生運動—その理論と歴史—』執筆
3. 新左翼運動の理論家へ
4. 前衛と大衆

おわりに

はじめに

大学闘争が昂揚した 1960 年の安保闘争から 1968 年の東大闘争までの間、『東京大学新聞』などで学生運動論を展開した廣松渉は、大学闘争が下火になった 1970 年以降も新左翼運動を総括する座談会に数多く出席するなど、戦後学生運動史において一定の役割を果たしてきたといえる。

そうした学生運動論と並行して、「疎外論から物象化論へ」というスローガンのもと打ち出された廣松のマルクス論は当時、廣松が支持していたブント（共産主義者同盟）の理論的支柱になったと理解されてきた。その理論的業績をたどれば、1956 年 6 月 20 日に東大学生運動研究会名義で発刊された『日本の学生運動—その理論と歴史—』の大半を執筆担当しているが、その後学生運動関連で言説を発表するのは、7 年後の「学生運動の現在に思う 討論会を司会して」『東京大学新聞』1963 年 11 月 20 日付となっている。

前者は、現役学生として学生運動自体を理論的に解明し、学生に運動の意義を呼び掛けることを目的としており、末尾をこう締めくくっている。

最後につけくわえておけば、本書の全叙述は進歩的學生は勉強して理論の面で闘争に貢献するのが第一の義務だとする意見の誤りをバクロしたものと考える。六全協以後出てきたこの誤った意見は、學生層がプロレタリアートの直接予備軍とはなりえないとする「戦前理論」に基礎をもっている。彼らは、プロレタリアートの立場に完全に移行している人間として、學生の間に送りこまれたプロレタリアートの分遣隊に属することを忘れていたのだ。<sup>1</sup>

一方、7年後に発表された後者では、廣松は、駒場祭委員会の要請を受け駒場祭でのパネルディスカッション「學生運動の今後と課題」の司会役をつとめている。討論には、教養学部自治会、共産党の青年組織である民主主義青年同盟、ブントとも通称される社会主義學生同盟、社会主義者青年同盟、革命的共産主義者同盟第4インター日本支部から分派したメルト同盟、構造改革派、マルクス主義學生同盟中核派、マルクス主義學生同盟革マル派の八派の代表者が参加し、廣松は議論をとりまとめる立場に立っている。ここで廣松は、マルクス主義を教条化することがすでに有効性を欠いており、それに代わるものを「共同主観的に確立すること」が必要であると説いたのだった。

当面のところ、待望の体系が手許に存在しない限り、社学同の成島君<sup>2</sup>の提唱に従って、不断の決意的実践の過程で現時点における思想を互いに対質していくこと、それを保証する組織態勢と活動スタイルを確立すること、これこそが「沈黙を克服するための緊要にしてかつ現実的な課題」であろう。<sup>3</sup>

---

<sup>1</sup> 東大學生運動研究会『日本の學生運動—その理論と歴史—』（新興出版、1956年）、316頁。執筆者の一人である中村光男がこの著作について触れたエッセイがあるが、廣松自身は特にそういったことを行わなかったようである。中村光男「今日の學生の政治的責任—いまこそ祖国の政治的危機に対決しよう」『學生生活』1956年6月号。『資料・戦後學生運動 第4巻』（三一書房、1969年）、42頁参照。

<sup>2</sup> 社会主義學生同盟マル戦の成島忠夫であると思われる。なお、1966年12月、中核派・社学同・社青同解放が「三派全学連」が結成され、成島は副委員長になっている。小熊英二『1968(上)』（新曜社、2009年）、235頁。

<sup>3</sup> 「學生運動の現在に思う 討論会を司会して」『東京大学新聞』1963年11月20日付。ここでの廣松の肩書は元東大學生運動研究会会員、人文科学研究科大学院博士課程となっている。

ここに見られるように、廣松渉が 60 年前後の学生運動において指導的な役割を担っていたことはたしかであるが、言説を発表していない空白期間があることも事実であり、その影響力には疑問の余地が残る。

学生運動を扱った研究は無数にあり、なかでも、廣松に直接学んだ熊野純彦が著した評伝は、その幼少期からの思想形成を辿り、学生運動時代の廣松についても理論的な業績と照らし合わせながら叙述している。<sup>4</sup> しかし他方で、近年の研究では、廣松理論の影響を疑問視するものも出てきている。たとえば、膨大な資料に基づき 1968 年前後の学生運動を包括的に扱った小熊英二は、「あの論文がでることによってブント内部が沸き立つようなことは全然なかった」「要するに何が書いてあるのか、皆全然分からなかった」と当時のブント同盟員の言葉を引き、1966 年にブントの機関紙『共産主義』で発表された廣松の「疎外革命論批判序説」はむしろ傍流であったと指摘する。<sup>5</sup> また、新左翼運動をポストモダンの源流と位置付ける大嶽秀夫も、廣松についてはほとんど触れておらず、1957 年頃のブント創設時に理論的支柱となったのは、姫岡怜治（青木昌彦）らであるとしている。<sup>6</sup> このように、学生運動における廣松渉の立ち位置に注目しながらその理論と実践を扱った研究は数少ないが、それをもって廣松渉の言説を無視するわけにはいかないだろう。むしろここで問題としたいのは、廣松がどのような運動理論を受容しながら学生運動にかかわり、またどのように自身の理論を形成していったのかを、廣松の視座に即してたどり直すことである。その際、革命論の一側面として見ることができる「物象化論」などの廣松の理論自体に踏み込んだ考察が必要不可欠であるが、ここではその前梯段階として廣松を思想上に位置づけるという実証的な方法を採用している。

こうした観点を踏まえ本稿では、廣松が学生運動の当事者であった時期に発した言説を

---

<sup>4</sup> 熊野純彦『戦後思想の一断面 哲学者廣松渉の軌跡』（ナカニシヤ出版、2004 年）参照。

<sup>5</sup> 小熊前掲書、264 頁。

<sup>6</sup> 大嶽秀夫『新左翼の遺産 ニューレフトからポストモダンへ』（東京大学出版会、2007 年）、43 頁。ただし、大嶽は初期の全学連について特に参考になったものとして、上記の『日本の学生運動—その理論と歴史—』を挙げている。姫岡怜治は第一次ブントを代表するイデオログであり、『共産主義』3 号 1959 年 6 月に掲載された論文「民主主義的言辭による資本主義への忠勤—国家独占資本主義段階における改良主義批判—」は、「姫岡国家独占資本主義論」といわれ、第一次ブント全過程を支えた綱領的文獻とされている。高沢皓司・高木正幸・蔵田計成『新左翼二十年史叛乱の軌跡』（新泉社、1981 年）、57 頁。

読み解き、そこで提示された理論と実践の関係からその意を汲み取っていきたい。

## 1. 学生運動の活動家としての出発

廣松が学生運動へとコミットしていくのは、大学入学以前の九州時代にさかのぼる。<sup>7</sup> 廣松渉は、1933年8月1日、父廣松清一、母禮子<sup>のりこ</sup>の長男として山口県の厚狭に生まれている。その後、1938年に技師である父の仕事の都合で朝鮮の黄海州へと移ったのち、1942年には日本に帰国し、翌年には父方の実家がある福岡県柳川に落ち着いている。大学入学のために上京するまで、廣松は柳川で過ごし、九州の生まれであることに終生誇りを抱いていたようである。1946年には旧制時代の伝習館中学へ入学し、日本青年共産主義者同盟（青共）に加わっている。中学時代の廣松は、一ヶ月の停学謹慎処分を受けるなど、粗暴なふるまいを見せていたようである。自身の回想や旧知の人間が触れているように、ナイフを懷に忍ばせて通学していたというエピソードからそれをうかがうことができる。<sup>8</sup> 学内では、社会科学研究会に入り、マルクス、エンゲルス、フォイエルバッハなどに言及した論文「社会科学と自然科学」<sup>9</sup>を残しているが、活動の場は主に学外の党活動であった。党活動は久留米の共産党地区委員会の事務所の手伝いに始まり、青共の地区委員会主催による県会議員との立会演説会にも臨んでいる。

さらに、1949年から1950年にかけて、全学連の東京中央と接触のある九州大学の学生達との付き合いも始まっている。廣松は、「そんな中で50年の春休み頃はその九大の連中なんかと付き合いがあったんですが、おそらくそのときに反戦学同もスタートしてたんじゃないかなあ」「反戦学同ってのは九大からスタートしたんですよ。九大自身が東京の中

---

<sup>7</sup> 熊野前掲書、廣松渉著・小林敏明編『哲学者廣松渉の告白的回想録』（河出書房新社、2006年）を参照。なお、廣松自身の回想や関係する学生運動資料について、この二書から教えられるところが多かった。

<sup>8</sup> 「いや、ドスなんていつだって持ってるさ。…そりゃそうだよ君、丸腰で歩くなんて、そんなみっともないことするけえ(笑)。」（廣松・小林前掲書、29頁）「ぼくは中学伝習館の一年生に入学した頃から、高校生の頃まで、内ポケットに、いつも刃物を忍ばせて通学していましたよ。」（成清良孝『廣松渉における人間の研究』（一竹書房、1996年）、571頁）前者は廣松自身の発言、後者は廣松の発言を成清が回想したものである。

<sup>9</sup> 成清前掲書に全文が掲載されている。

央とつながって何か考えてたんだね」と推測している。<sup>10</sup> 事実、日本共産党九大細胞は、1950年4月に、「今や、光栄ある民族独立闘争に立ち上がるべき時が来た。諸君！反戦同盟を即時結成しよう！！」という声明を出している。<sup>11</sup> また、廣松が目にしていたかは定かではないが、九大第二分校自治会も1950年4月25日に、「九大より全日本の学生諸君に訴う」という表題で次のような声明を出している。

今私共は日本民族が独立と自由を保持しうるか、それとも一切の既得権が剥奪され奴隷と滅亡に落入るか、これに就いて歴史上曾つてない重大な岐路に立たされつつあります。…

然るに憂うべくも、日本に於ける反戦独立運動は未だに統一された全国的運動として展開されていません。…諸君、全国に反戦独立の統一戦線を結成し、協同闘争を強化しようではありませんか。各学校各職場各農村に平和を守る会や反戦同盟を組織し、強力な全人民の団結を固めようではありませんか。

私共は諸君が、私共の此の闘いの勝利の為に、日本の完全独立と世界の恒久平和確

---

<sup>10</sup> 廣松・小林前掲書、73～74頁。反戦学同とは反戦学生同盟のことを指し、アンチ・ゲールの頭文字をとってA・G(アー・ジェー)とも呼ばれた。廣松は次のように説明している。「反戦学生同盟は、帝国主義戦争反対一すなわち、戦争一般に反対するのではなく、階級戦争や民族解放戦争は、被支配者の側に立って支持することを含みとする一を中心綱領とする個人加盟制の全国的学生組織。この組織は50年？(判読難)の新制九大の闘争に際していちやく結成され日共国際派が解体したのちも存続し58年ブント結成の動きと相即的に「社会主義学生同盟」(社学同)に発展的解消をとげた。／50年、51年の学生運動、および55年における学生運動の「復活」に際して、反戦学生同盟が果たした役割は極めて大きい。50～51年段階での反戦学生同盟は、全学連各級機関、各大学・高校・中学の自治会機関と一般学生とを結ぶ媒体として、また共産党(国際派)細胞と一般学生とを結ぶ媒体として機能し、全員加盟制をとるわが国のポツダム自治会の組織的弱点をカバーしつつ、一連の大闘争を担う活動家組織としての役割を全うした。51年後半に至って国際派が解散したのちには、50年闘争のイデーと国際的経験、伝統を組織の体内に伝承しつつ、所感派の指導する学生層に対する批判勢力として存続し、日共の六全協以降、55年の学生運動「復活」に際しては、その推進者となり、第三期の学生運動を復権せしめた。／なお、反戦学同が学生層だけを独自の組織し—国際派の青年大衆組織は、階級・階層別になっており、それらが合？(判読難)体を形成した—民青のごとき青年一般を包括する組織形態をとらず、また、中間の機関をおかず各支部が中央に直結する組織形態をとったのは、便宜的な手段ではなく、国際派の青年運動論・学生運動論の体系に基くものである。」「ことば欄A・G」『東京大学新聞』1964年5月20日付。

<sup>11</sup> 『資料・戦後学生運動 第2巻』(三一書房、1969年)、85～86頁。

立の為に、今後常によき連携と絶大な御援助を寄せられる事を切望し、確信します。

12

日本民族の独立を強く主張しているので、一見すると右翼的にも思えるが、当時は反アメリカ帝国主義という風潮が強かったため、敗戦直後も左派は「民族」を「民衆」や「人民」などと同義語として用い、その傾向は敗戦後十数年続いたようである。<sup>13</sup>

ここで注目したいのは、廣松がすでに東京へと意識を向けている点、また当時の学生運動からしてすでに全国闘争の萌芽が見られるという点である。これから6年後に発表される廣松らの『日本の学生運動』（1956年刊）において、廣松が日本の民族性への期待や全国闘争の重要性をくりかえし強調しているのは、九州時代の党内活動にその影響をさかのぼることができるといえるだろう。

そしてさらに、1950年6月25日の朝鮮戦争勃発前後に、廣松は反米活動を行い、それが理由で新製の福岡県立伝習館高等学校を退学処分になっている。

僕[廣松]<sup>14</sup>らの撒いたビラの中身はもう具体的に覚えていないけど、おそらく単純な朝鮮動乱反対の反戦平和主義じゃなかったですよ。こっちも北側[南側の言い間違いか]が仕掛けたと思ってるし、要するにアメリカ帝国主義打倒というような言葉が入るわけです。<sup>15</sup>

そしてこの時期、共産党内部で、のちに廣松にも強く影響することになる重要な動きがおきている。1946年2月に行われた第五回党大会では、「平和革命」を定式化し党の政治方針となる理論を発表した野坂参三、行動力実践力に富み過渡期にある大衆の動向をつかむのに強力な指導力を発揮した徳田球一、そして情報の豊富さで重宝され徳田の片腕として党指導部にのし上がった伊藤律らが実質的な中央となる体制が発足した。所感派と国際派との対立は、ソビエトに指導された国際的な共産党の情報連絡機関であるコミンフォル

---

<sup>12</sup> 同上、91～92頁。

<sup>13</sup> 小熊英二『＜民主＞と＜愛国＞』（新曜社、2002年）、123頁、393頁などを参照。

<sup>14</sup> 括弧内引用者。

<sup>15</sup> 廣松・小林前掲書、76頁。

ム<sup>16</sup> の機関紙『恒久平和のために、人民民主主義のために』に、1950年1月6日付でオブザーバーという筆名の『日本の情勢について』が掲載されたことに端を発している。小山弘建によれば、この匿名の論文<sup>17</sup> は、戦後日本の運動に対してなされたはじめての国際批判であったという。この批判は、直接には、通称「野坂理論」と呼ばれる党の「占領下の平和革命」論の幻想を暴露したものであったとされるが、共産党の大分裂を引き起こしたのは、それが理論的な批判であったからではなく、むしろ論文が対象としていない組織や組織に属する人間の相互関係などの「形而下」的なものであったからであるというのである。<sup>18</sup> この批判に対して共産党政治局は、1月12日、「有難迷惑なお節介は止めてほしいという趣旨」の『「日本の情勢について」に関する所感』を発表した。『所感』を発表した中央主流が所感派であり、これらの国際批判を受け入れよとしたのが、国際派である。国際派という名称は、コミンフォルム批判を機に、ソ連共産党を中心とする国際共産主義運動に忠実たんとすることから生まれている。所感派には、徳田球一、野坂参三、伊藤律、志田重男、春日正一、紺野与次郎らがあり、国際派には、宮本顕治、志賀義雄、春日庄次郎、神山茂夫、袴田里美、中野重治、蔵原惟人らがいた。両者の分裂は、朝鮮戦争が始まった1950年6月下旬であるという。そして、統一した分派組織を持たなかった国際派は、次々と撃破されていった。

当時存在した、各地方委員会のメンバーのうち累計すれば過半数のメンバーが無惨にも党の隊列から放逐された。解散、除名の嵐は党組織の末端まで吹きすさみ“絶対数ではまだ少数であるが有能なアクティヴ（活動家）の大半が国際派に追いやられた,,

---

<sup>16</sup> コミンフォルムについては、廣松は田中久男の筆名で次のように説明している。「ソ連および東欧の共産党・労働者党と、仏伊の共産党によって構成される“情報交換のための連絡会議,,であるが、フルシチョフ時代になって解散するまで事実上は世界共産主義運動の指導機関としての権威を有するものであった。」田中久男「参考資料 国際派と所感派(上)」『東京大学新聞』1964年4月22日付。

<sup>17</sup> 津田道夫によれば、オブザーバー署名の筆者は現在ではスターリンであることが分かっている。「スターリン＝コミンフォルムの一連の発議は、東南アジアにその勢力圏を拡張しようとした冒険主義的な世界戦略であり、いまではスターリンの執筆とわかっているコミンの日本批判も、その一環であったと考えられる。」小山弘建著・津田道夫編・解説『戦後日本共産党史 党内闘争の歴史』（こぶし書房、2008年）、308頁。

<sup>18</sup> 小山・津田前掲書、79～80頁。



といわれたほどである。<sup>19</sup>

廣松はこの時期、九州に活動の拠点を置き、党内部の国際派に沿った行動をとっていたようである。この時期の共産党は、所感派と国際派とが対立しており、全国に先駆けて反戦学生同盟の結成を呼び掛けていた九大の学生と接触があったことなどから廣松は国際派と睨まれ、その結果、党から除名処分にあっている。

廣松自身は、「まあ要するに考え方がよろしくないというんでクビになった形ですね、形式上はね」と回想しているように、国際派よりの考えを持っていたことを認めている。また、1964年の『東大学生新聞』での回想でも、『日本の学生運動』を執筆した1956年当時も旧国際派路線に固執していたと述懐しており、1950年の体験は後の理論形成にも影響を残すことになったようである。

そして、高校を退学処分、党を除名処分になった廣松は、1951年11月に当時発足したばかりの大検に合格した後、1952年には東京学芸大学数学科に一時籍を置いている。そしてこのとき、廣松が巻き込まれるのが、「現代版寺田屋騒動」といわれるテロ・リンチ事件である。

1952年、武井全学連中執委員長の意図に反して、前衛的な学生の大部分は、極左冒険主義<sup>20</sup>の志向を持つようになったという。<sup>21</sup>そうした学生の動きが起こったのと同時期に、

---

<sup>19</sup> 田中久男「参考資料 国際派と所感派(上)」『東京大学新聞』1964年4月22日付。

<sup>20</sup> 廣松は極左冒険主義を次のように説明している。「ことば 極左冒険主義」『東京大学新聞』1964年6月3日付。「運動の主体的条件を顧慮せずに、精鋭の分子だけで猪突する“左翼、的偏向。これは一見したところ左翼的にみえるが、広汎な大衆をねばりづよく組織化する困難に耐えることができず一敵の攻撃の前にあわてふためき、闘争を焦るの余り、大衆の一部に形成された一揆主義的な気分に追隨して一安直な道を選ぼうとするものであり、本質的には右翼日和見主義と同じ根をもった日和見主義だといわれる。／日本共産党が、51年秋から52年にかけてとった“軍事方針”は、極左冒険主義の典型的な一例とされている。国際派が解体したのち、所感派が完全に支配するに至った日本共産党は、51年秋から“中核自衛隊”の組織化に着手し、52年には“火焰ビン”や“黄金バクダン”を主要な武器として街頭での武力闘争をくりひろげ“血のメーデー”、“新宿駅占拠事件”、“国鉄吹田操車場事件”などをひきおこした。それを平行して、日本共産党は“山村工作”を強化し“解放区”の設定を試みた。／この軍事方針が極左冒険主義だといわれる理由は、中国共産党の武力解放方式を、客観的条件の相違を無視して直輸入したということ自身にあるのではなく、主体的条件を顧慮せずに盲動したことにもとづく。」

<sup>21</sup> 山中明『戦後学生運動史』(青木新書、1961年)参照。

当時の吉田内閣は、3月27日、特別治安立法として「破壊活動防止法案要綱」を発表する。これは、日米軍事同盟に沿うための、国内の反体制運動に対する露骨な干渉を意味していたとされる。この破防法反対のために各大衆団体は闘争に立ち上がるが、大衆のエネルギーは破防法反対闘争だけに向けられたわけではなく、各地で挑発的な闘争が巻き起こっていった。

このように、極左冒険主義が全国で展開されるなか、1952年6月26日、廣松は東京学芸大の代議員として全学連第五回大会が行われる京都へと赴いた。そこでリンチ事件が起こったのである。

事件は26日夜発生し、五回大会期間中、三日二晩にわたった。26日大会開催当夜、まず関大、立命館大の反戦学生同盟が「人民警察隊」と自称する日共（京都）府県委員会の指導する学生黨員たちのため、立命館大の地下の一室に監禁された。三日二晩殆んど絶食状態におかれ「スパイ系図」など、気狂いじみた内容の自白を強要され、皮バンド、直径二糎の鉄棒、焼きごて、荒なわなどを使用してなぐる、けるの暴行を加え、それは言語に絶した。リンチ事件発生翌日の朝彼らは手に手に鉄棒をたずさえ反戦学生同盟員の寄宿先の個人宅を襲い、大挙して部屋に乱入し、大立ちまわりとなった。「現代版寺田屋騒動」といわれる所以である。このあとさらに立命館大、名大、東京学芸大の三名がリンチを加えられ、各々縛られたり、目かくしをされて、「帝国主義者のスパイ」であるとの自白をせまられ、拒否し続ける同盟員になぐる、けるの暴行が続けられた。…しかし、彼らはテロ・リンチによって反戦学生同盟を屈服させることはできなかった。<sup>22</sup>

ここにみられる「東京学芸大」の学生が廣松渉である。<sup>23</sup> 後年、このことを廣松は、「ぼ

---

<sup>22</sup> 前掲書、174～175頁、傍点引用者。

<sup>23</sup> このとき廣松は反戦学同には加盟していなかったようだが、次の資料から分かるように、事実上、同盟員と同じ扱いを受けている。「1952年6月26日から28日の3日間にわたって、第五回全学連大会が京都で開かれた。この期間中に日本共産党立命館大学細胞によって大会の正式代議員、評議員及び傍聴者として京都に集った反戦学生同盟員、教育大学飯島侑以下11名、並びに非同盟員である東京学芸大学の広松渉君に対して皮バンドその他の道具を用いて集团的暴行が加えられた。これは第五回全学連大会で採択された『反戦学生同盟解散支持決議』及び武井昭夫旧全学連執行委員長以上27名の

くはねえ、逮捕歴はないんだ。リンチされたことはあるんだけどねえ」<sup>24</sup> と笑って述べたという。

その後、廣松は九州に帰り受験勉強をしたのち、1954年には東大に入学している。一年休学して九州に戻っているが、翌55年には再び東京に上京し、旧国際派の残党が多くいる東大教養学部歴史研究会に入っている。同じ年の7月に日本共産党第六回全国協議会（通称六全協）が開催されたさいには、旧国際派の無条件の復党が認められ、廣松も復党したのだった。このことを廣松は、後年の1964年6月17日、『東京大学新聞』でのコラムで55年の六全協について説明しており、「旧国際派を復権した点で画期的なものである」と高く評価している。

とはいえ、六全協を契機として、それまで党がとってきた誤った路線に対する批判が党内に高まってきた。それは“六全協ノイローゼ”に典型に現れたような清算主義を生みだし、多くの脱落者を生みだしながらも、学生戦線をはじめとして、日共の“脱皮”を可能にし、その後次第に日共が大衆的影響力を回復していく転機となりえたのである。<sup>25</sup>

そして、同年1955年の秋には、亘木公弘の筆名で「唯物弁証法における矛盾の概念」という論文を東京大学教養学部学友会の冊子『学園』で発表している。ここでは、「覚悟的走書」とであると前置きしながら、『資本論』冒頭の使用価値と価値との矛盾の分析に始まり、廣松の主要な理論となる「関係の第一次性」に通ずるような自身の関係概念を主張している。<sup>26</sup> この論文は、学生運動の理論に直接触れるものではなかったが、「それでも

---

同盟員、非同盟員を『学生戦線より追放する』決議の裏付けをするため反戦学生同盟が共産党の分派組織であり、且つ帝国主義者の意識的スパイとして学生戦線分裂の策動を行ってきたという『自白』を強要して行われたものである。』『資料・戦後学生運動 第3巻』（三一書房、1969年）、77頁、傍点引用者。資料によって廣松が広松と表記されていることがあるが、以後特に注記せずママとする。

<sup>24</sup> 熊野前掲書、39頁。

<sup>25</sup> 「六全協」『東京学生新聞』1964年6月17日付。本記事には筆名はないが、「学生運動の軌跡」の連載開始時のコラムには(W)の筆名があるので、廣松の執筆と思われる。

<sup>26</sup> 「事の真相に於ては、関係そのものが、一この関係たるや関係するものと関係することとの弁証法的統一である。一存在性と存在者との完き統一としての存在であるのであつて、弁証法的矛盾は、斯かる関係の一つの展相にすぎない。」亘木公弘「唯物弁証法における矛盾の概念」『学園』10号、東

例えば黒寛<sup>27</sup> あたりが間接的に『自然弁証法研究会』を通じて、あれを書いたやつにちょっと会ってみたいというようなことを言ったり、学生からもある程度の反応が出たりしました。」<sup>28</sup> と述べているように、この時期からすでに学生運動の理論家として周囲からの注目を集めていたようである。たとえば、1959年に姫岡怜治の筆名でブントの綱領となる「姫岡国家独占資本主義論」を著し第一次ブントの代表的イデオログとなる青木昌彦は、1956年大学入学当時の廣松との出会いをこう回想している。

中でも、角帽時代の雰囲気を残した痩身長髪で、圧倒的なカリスマ性を発散させる先輩がいた。50年の反レッドパージ学生運動時に高校退学となり、大検で東大に入り、後の全共闘時代には名大、東大の哲学教授として学生に大きな影響を与えることとなる、廣松涉だ。

彼に大学生協でコーヒーに誘われた。何事か、といぶかると「日本共産党はもう

---

京大学教養学部学友会学園編集部編、1955年）、66頁、傍点ママ。

<sup>27</sup> 黒田寛一を指す。黒田は、1927年生まれ、革共同の創始者であり、革マルの理論的支柱となる人物である。1943年末に腎臓病と皮膚結核にかかり、旧制東京高校を中退した後、実家である黒田外科でマルクス主義研究に専心する。1952年に処女作『ヘーゲルとマルクス』を発刊した後、1954年には結核菌が目を冒し失明するが、その後も秘書の朗読により読書を継続し次々と著作を発表する。黒田の著作の読者が集まり始まった「弁証法研究会・労働者大学」から、黒田理論の研究サークルができていった。立花隆『中核 VS 革マル』（講談社文庫、1983年）、54～59頁参照。実際に黒田寛一が廣松と会うことになるのは、1956年初めのことであり、黒田は廣松を悼む文章で次のように述べている。「想えば、「廣松涉」という存在を、私が知ったのは、1956年初めのことであった。その当時、音読によって私を助けてくれていた森下周祐君に「メシよりも経済学が好きな学生を紹介して欲しい」と要請したところ、「そのような学生はみあたらないけれども、メシよりも哲学が好きな学生がいます。一もちろん、音読者としてではなく、自分の前途にニヒル感をいだいていた学者の卵として、彼は私のまえにあらわれた。／畳の上から1メートルほどの位置に手をとめて、「これぐらいノートを書きためたけれども、しがない高校の教師にしかねないでしょう。……本を出版するゲルトもないし、……」と。」黒田寛一『場所の哲学のために(下)』（こぶし書房、1999年）、288頁。他に、廣松について触れた著作として、黒田寛一『＜異＞の解釈学 熊野純彦批判』（こぶし書房、2008年）参照。なお、廣松の記しているところでは、黒田とは1956年2月10日に会い、黒田の説を自然科学専攻者の立場から批判的継承することを目指した論文、関根克彦「法則（性）は創造されるか？」についての廣松の見解を述べたよしである。「尚以下は、去る十日言葉の端々に掛けてではあるが、黒田寛一氏に直言した処である」（廣松涉「法則（性）は創造されるか？」に対する批判的評注『学園』14号、東京大学教養学部学友会学園編集部編、1956年、35頁）

<sup>28</sup> 廣松・小林前掲書、144頁。

だめだが、東大細胞でもう一度本当のマルクスを復活させる。参加しないか。」と言う。…廣松はその後運動から離れて学業に専念したので、ほとんど接点はなくなったが、これは私の人生行路の方角を決める出会いとなっただけに、はっきりと記憶がよみがえってくる。<sup>29</sup>

## 2. 『日本の学生運動—その理論と歴史—』執筆

六全協が発表された7月の末から年内、党内では「六全協ショック」「六全協ノイローゼ」「六全協ボケ」と呼ばれる、終戦直後の虚脱状態に似た状態がつづいたという。<sup>30</sup> こうしたアノミー状態のなか、学生の大部分が旧国際系統に移っていったことを見逃さず、廣松は1956年2月、東大教養学部歴史研究会学生運動史研究グループ有志名義で「学生運動の正しい発展のために—その課題と展望—」（『学園』東京大学教養学部学友会）を執筆している。この論文は、学生層をインテリゲンチヤ及び青年としての「二重の規定性」と分析し、「学生層はインテリの中の青年層であり、青年としての特質、鋭敏な神経、理想への憧れ、積極的な行動性を持つものである」としている。そしてさらに、学生が担うべき課題として次のように述べたのである。

学生層の客観的规定性、学生運動の蓋然的方向は、必ずしも同時にすべての学生によつて理解されるものではなく、学生層の史的当為（ゾレン）を深く自覚した部分と、未だそれに至っていない部分とをつくり出すことは避けられない。この自覚的部分が、過去の学生運動を分析して、その成果と欠陥とを明白にすること、更には運動上、組織上の正しい方針を確立して、それによつて全学生層をいかに結集するかが、当面する重要課題である。先進的部分によつて提示されるとはいつても、それが外部から、偶然的に持ち込まれるものではなく、全学生層のものである。先進的部分によつて提示される課題は、全学生を結集する方向をも規定するものであつて、この意味に於いても全学生層の課題であり、また展望にも連るものである。<sup>31</sup>

<sup>29</sup> 青木昌彦『私の履歴書 人生越境ゲーム』（日本経済新聞出版社、2008年）、32～33頁。

<sup>30</sup> 安藤仁兵衛『戦後日本共産党私記』（文春文庫、1995年）、213頁。

<sup>31</sup> 東大教養学部歴史研究会学生運動史研究グループ有志「学生運動の正しい発展のために—その課題

つまり、学生運動の方向性は、学生層全体から示されるのではなく、「学生層の史的当為」を自覚した「先進的部分」によって指し示されるというのである。しかもそれは、「外部」から偶然的に持ち込まれるのではなく、学生層内部にある「先進的部分」が担いながらも全学生層に通ずるものであるという。そもそもどのようにして、千差万別である学生層の「内部」から「先進的部分」が現れ、自覚したうえで理論を構築することができるのかということの問題としなければなるまいが、さしあたりここでは、廣松自身が理論家としての立場を自覚的に採った端緒をここに見ておきたい。

こうした歴史研究会学生運動史研究会によってなされた研究をまとめたものが、1956年6月に出版された『日本の学生運動—その理論と歴史—』である。この著作は、「第一部 来るべき日本の革命戦略と学生運動の位置」「第二部 戦後日本学生運動史」「第三部 学生運動の当面する諸問題」の三部で構成されている。<sup>32</sup> 執筆の分担は、第一部全三章は門松暁鐘（廣松渉）、第二部・第一期、第二期は門松暁鐘、第三期は中村光男、第四期、第五期は伴野文夫、第三部は門松暁鐘、年表は伴野文夫となっており、大半を廣松が執筆したことになる。廣松自身が述べるには、「旧国際派の学生運動の理念と戦略と戦術みたいなものを述べたもの」<sup>33</sup> で、全国の細胞に広まったという。さらに、「旧国際派の学生運動路線を広め、かつ納得させることになったんじゃないかな」<sup>34</sup> と自負しているように、学生の動きを見ながら戦略的に運動論を展開したことがうかがえる。また、この時期に理論が生み出された背景については、1930年生まれで廣松と同世代であり、全学連結成に

---

と展望—」（『学園』特集号、東京大学教養学部学友会学園編集部編、1956年）、50頁。目次構成は、第一章 学生層の分析、第二章 学生運動の基本分析、第三章 学生運動沈滞の原因、第四章 当面する課題と展望、附 国立大学授業料値上げ反対斗争の展望となっており、『日本の学生運動』（1956年刊）の廣松執筆担当の第一部に振り向けられたと考えられる。

<sup>32</sup> 各部の構成はさらに、第一部「第一章 国家権力と支配階級」「第二章 来たるべき日本革命の政治戦略」「第三章 日本学生運動の任務と組織」、第二部「第一期 学園民主化闘争の時期」「第二期 日本学生運動の質的転換期」「第三期 反帝・平和への全面的高揚の時期」「第四期 昏迷と沈滞の時期」「第五期 伝統復活の時期」、第三部「一 当面する戦術目標としての憲法改悪阻止」「二 当面する主要な一環としての憲法問題」「三 各種学内団体の戦術配置」「学生の経済的要求をどのような見地からどのようにとりあげるか」「五 遅れた学校ではどうすればよいか」となっている。

<sup>33</sup> 廣松・小林前掲書、145頁。

<sup>34</sup> 同上。

携わったのち 1950 年の党分裂時には「国際派」として日本共産党から除名処分にあった大野明男が次のように述べている。

前章で私は、政治的な運動の力量というのは、結局のところ人間の心をいかに幅広く、底深く組織するかにかかっていると書いた。そのことを学生運動史に適用してみれば、運動が盛り上がるときは必ずそれに先行して、その時点での学生の心をとらえ、それをゆり動かすだけの理論の創造・展開があったはずだ、ということになるだろう。そして、事実そうであった。

二十五年の盛り上がるの前には、コミンフォルム批判に沿ってであるが、通称「武井理論」といわれる初代全学連委員長武井昭夫とそのブレーンが展開した理論が、各大学の党員・活動家の心を統一していった。三十年の六全協後の崩壊状況のなかでは、この武井理論の再学習が、復活のキッカケとなった。<sup>35</sup>

廣松も、大野と同様に党から除名処分にあった 1950 年には、「武井理論」に触れていたと考えてよいだろう。大野の見方に従えば、廣松らが 1955 年の六全協の翌年『日本の学生運動』を出版したのも、武井理論を踏襲することが運動に影響力を持つことを見越してのことと思われる。しかし、必ずしも同書が受け入れられたというわけではなく、内容上の意見の対立から、全学連中央の島成郎、高野秀夫らから絶版声明を要求され、理論上大部分依拠していた武井昭夫からも後述するように酷評されている。<sup>36</sup> これ以後 7 年間、廣松は沈黙することになるが、事実上これが廣松の最初の理論的仕事となった。

上で述べたような経緯で『日本の学生運動』を著した廣松は、その序文で「学生運動に積極的に参加している学友諸兄」や「沈滞を打破する途を模索しているすべての学友諸兄」に向けて、こう述べている。

学生運動を理論的に解明することは、現在緊急な実践的な課題となっている。しかし、この仕事は非常に困難である。なぜというに、日本学生運動が世界史上類例のな

---

<sup>35</sup> 大野明男『全学連 その行動と理論』（講談社、1968 年、66 頁）

<sup>36</sup> 廣松・小林前掲書、144、151 頁。

い性格をもっているために外国の研究があまり役に立たない上に、先人の体系的な研究の発表が全然ないといえるような状態にあるからである。われわれが敢てこのような困難な仕事に着手したのは、現役の学生として、この課題の遂行が焦眉の實踐的要請であることを痛感するからにはかならない。<sup>37</sup>

このように、あくまで日本の学生運動の現状に鑑み、「實踐的要請」から「理論的」な解明を目指す姿勢からは、当時の切迫した雰囲気を感じ取ることができる。六全協後に学生層が国際派に流れたことを見て、迅速に執筆に取り掛かったのだろう。

すでに述べたように、廣松は九州時代に反アメリカ帝国主義を呼び掛けていた。その姿勢は、この著作の中でも全面的に打ち出されている。そこで問題となるのは、日本の独立と反戦学同がいかに両立するかであるが、「現戦略段階では、革命的民族戦線（運動）は平和戦線（運動）に優位するのである。」<sup>38</sup> と述べているように、あくまでアメリカ帝国主義に対抗し、日本が独立するための民族運動を重要視している。

日本の反帝民族闘争の勝利こそが、何ものにもまして世界平和への貢献であることを忘れてはならない。その上に、日本ではおよそ民族闘争の課題と平和闘争の課題とが、誰の目にも明らかなように、不可分に結合している。<sup>39</sup>

このように民族闘争を学生層が担うことを強調するのは、廣松が参照している「武井理論」とそれ以前の「戦前派理論」との違いが背景にある。「武井理論」の中心は、「日本学生が層としてプロレタリアートの闘争に同盟軍として参加しうること」、そして「日本学生運動の戦略的任務は先駆的役割の遂行にあるとすること」であるという。<sup>40</sup> それに対して、「戦前理論」の中心は「学生が層としてプロレタリアートの周囲に結集しうることを事実上否認し、従って先駆的任務遂行の可能性をいわんや現実性を否認するところにある」。

---

<sup>37</sup> 東大学生運動研究会 前掲書、1～2 頁、傍点引用者。

<sup>38</sup> 前掲書、104 頁。

<sup>39</sup> 同上。

<sup>40</sup> 東大学生運動研究会前掲書、182～183 頁。



41 日共指導部の間接予備軍として学生を位置づけていた「戦前理論」に対して、「武井理論」は「意識性の確立」を成就することで「第一次同盟軍＝直接予備軍」として闘争に参加できると廣松は述べる。こうした「武井理論」に棹さす廣松は、学生の意識性を覚醒させるために、学生の規定から説き起こすのである。

廣松は、学生を「インテリ」として、また他方で「青年」としてという「二重の規定性」を持つものとし、この二つは有機的に統一され完全に一体化されているという。<sup>42</sup> さらに、「学生はインテリとしての明敏性、理想性、構想力と青年としての正義感、情熱、行動性といったものを併せもっている」という。<sup>43</sup> いささか学生を買いかぶり過ぎな印象を受けるが、「六全協ノイローゼ」「六全協ボケ」でアノミー状態に陥っている学生を鼓舞し、層として動員することを目的として本書を執筆していることを、考慮に入れておくべきだろう。さらに、廣松が強調して述べるのは、資本主義社会において学生の志向するところは様々であるということである。だからこそ、その向かうところを提示しようとしているのである。そして、「学生の社会的状態」についてこう述べている。

問題は彼をして貧困学生たらしめている彼の家庭状況ではなく、彼の家庭をして貧困たらしめている彼の出身階級（層）の状態である。これと並んで彼が卒業後属する階級（層）の状態である。

これを要するに、学生を社会運動へ向かわせるエネルギーの源泉は、抽象的に社会情勢一般に求めらるべきではなく、この社会情勢において学生の出身（及未来において属すべき）階級（階層）がいかなる状態にあるかということに求めらるべきである。このような見地における限りでの、乃至は、このような見地との相互関連の下に見られる限りでの、学生の社会的位置・状態に学生運動のエネルギーの源泉は求めらるべきである。<sup>44</sup>

---

41 同上。

42 学生の階層や主観的意識が動員力に関係していたことは、近年の研究でも指摘されている。大嶽前掲書、250～251頁。

43 東大学生運動研究会前掲書、108頁。

44 前掲書、109頁。

学生が正義感や情熱そして行動性をもっているとはいえ、廣松が意図したのは、そうした内面的な特性に訴えかけるということではなかった。彼が目指したのは、層としての学生がなぜ闘争の主体となるべきなのかを理論的に明らかにすることによって、学生層を動員するということだった。いわば、廣松の理論は、抽象的な「正義」や「情熱」といったこととそのものを学生闘争の原動力とみなすのではなく、そうした特性をも踏まえたうえで「学生の社会的状態」を分析するものだといえる。

「学生の社会的状態」とは具体的には、学生の出身母体が中間層であり、いずれはプロレタリアートへと転落していく運命にあるということを意味している。学生自身はプロレタリアートでもブルジョアジーでもないため、経済闘争の圏外にあるという。つまり、個人差が大きい経済的要求は統一された闘争のエネルギーの源泉とはなりにくく、それゆえ、「学生闘争は本質的に社会的・政治的闘争たらざるをえない」のである。こうして、廣松は学生の「情熱」と「学生の社会的状態」を結びつけ、次のように述べている。

経済闘争はありえずまた大規模な経済的要求にもと<sup>ママ</sup>ずいた闘争が存在する現実性も大きくないが故に、一般に学生闘争がおこりがたく、起る限りでは政治闘争としての性格を最初からおびるのである。一般に学生闘争がおこりたいとかいたが、これは社会的に学生層の社会的基盤が安定している場合であって、社会的政治的に不安定である場合には、インテリとしての敏感さと青年としての行動性とが結合されて激烈な学生運動が展開されるのである。理想を描くだけでなくそれを実現せねばやまない「観念性」と情熱とは、知性的に敏感であればあるだけ、小ブル・インテリとしての性格を強くもっていればいるだけ、強く激しい傾向すらあるのである。このことによって一国内では相対的に一番安定しているはずの主要大学から学生運動がおこる事実が説明されるであろう。<sup>45</sup>

廣松は、闘争の主体となる学生に期待される役割を、「先駆的役割」として定式化している。これは、「学生層が一定の社会的条件のもとでは、労働者階級や農民の革命的社會運

---

<sup>45</sup> 前掲書、125頁。

動に先駆する蓋然性を有するという理論」<sup>46</sup>と定義される、のちの全学連指導者である武井昭夫の「先駆性理論」を援用したものである。

先駆的役割とは、味方の戦線に先駆けて、闘いの方向を示し、或は敵の攻撃の方向を逸早く察知し、味方の陣営に警鐘を乱打する役割である。学生はインテリとしての鋭敏性とそれによって逸早く反応したたかう能力とをもっている。この学生の特質と能力とも<sup>ママ</sup>とずいて設定された任務が先駆的任務である。<sup>47</sup>

こうした扇動的な表現が当時どのように受け止められたかが気になるが、たとえば理論的先行者である当の武井昭夫は、『日本の学生運動』を「自己陶醉の戦略論」「無理論な極左主義」と酷評している。<sup>48</sup> 武井が同書に期待したのは、「この数年学生運動の渦中にあった筆者たちが、どれだけ自己の体験を内省することによって、学生戦線内の病根をえぐりだすか」ということ、そして「筆者たちの全体的体験に即した運動史が書かれること」であったが、「第一部の筆者の門松暁鐘の理論（<sup>ママ</sup>？）は、日本学生運動を真に領導してきた革命的理論とは無縁であり、称揚されている「武井理論」の大部分は筆者たちの理論にすぎないという。<sup>49</sup> 武井昭夫からすると、筆者らの学生運動の体験が運動理論に活かされておらず、闘争を煽るための偏った理論となっていると感じたのであろう。

ところで廣松は、実際の闘争形態としては全国闘争が最も有効であるとし、「この縦の

---

<sup>46</sup> 廣松渉「ことば 先駆性理論」『東京大学新聞』1964年4月22日付。

<sup>47</sup> 東大学生運動研究会前掲書、127頁。

<sup>48</sup> 武井昭夫『層としての学生運動—全学連創成期の思想と行動』（スペース伽耶、2005年）、452頁～462頁。なお、初出の論文は、『日本の学生運動』（東大学生運動研究会編著）への批判的注釈—自己の運動への真摯な批判・総括からの出発を望む—として全学連の準機関紙の役割を果たした『学生生活』（『学園評論』改題）1956年8月1日付第5巻第6号に発表されたものである。2005年に著作として出版された際に付された注記では、武井は「批判文言の強い調子には「武井理論」なるものの一面化への警戒が強く働いていたのであろう。」（武井前掲書、462頁）と当時を振り返っている。ここで武井は、「極左冒険主義と右翼日和見主義の諸偏向」がつきまとっていると批判している。

<sup>49</sup> 極左冒険主義とは、前衛が大衆を説得せず武装闘争を煽ることを指している。廣松らの『日本の学生運動』を武井昭夫が極左主義と批判していることは、この著作で展開されている理論が学生層全体に伝わるものではなく、「先進的部分」のみに通用する理論に過ぎなかった可能性を示唆している。

糸の中で横の糸として地域共闘が組まれなければならない」<sup>50</sup> という。そしてその中で、「全国学生の連帯感、共通の敵に対して結束して闘っているのだという一体感、自分達だけが孤立してはいないのだという確信、等が培われる」<sup>51</sup> としている。うがった見方をすれば、廣松が九州時代に党活動を行った経験や、九大から全国に反戦学同を呼び掛けたことが、こういった理論にもつながっていると考えられる。

しかし、いかに「先駆性理論」を重要視しているとはいえ、このように学生の特質を過剰に持ち上げるのは、傲慢なエリート主義とも誤解されかねない。それには、「大衆に無条件に奉仕するという俗受けしそうな思想こそ、最も憎むべき大衆侮蔑思想である」<sup>52</sup> と厳しい態度を見せている。つまり、大衆におもねるような思想は、むしろ大衆を侮蔑するものであり、運動を先導するものとしての自覚を持つことこそが学生に必要であると廣松は考えているのである。そして、学生が先頭を切って構成する組織の具体的な形態について、廣松は次のように言う。

かくて不可避免的に学生闘争の基本組織はヨーロッパの労働組合のように（CGT など）全学生によって構成される組織ではなく、個人加盟制による広汎な大衆組織となるであろう。そして他の、たとえば社民系、中立系の個人加盟制組織との、また、未組織学生との可及的に自治会に拠る共闘によって闘争をすすめるであろう。／個人加盟制のこの基本組織は決してセクト的なものではなく、民族戦線の綱領の線に従って組織されねばならないし、また組織されるであろう。このことによって学生は自治会員—学生というに等しい—意識から出て真に自己の社会的位置とゾレンに覚醒し、大衆的規模で未組織大衆に工作し、他の組織に属する者を説得し、特殊な学校を除いては学生の基本的部分を結集するであろう。<sup>53</sup>

ここで示されている組織は、一定の形を持っているわけではなく、個人がそれぞれ「自己と社会的位置とゾレンに覚醒」することによって成り立つという不定形なものである。そ

---

<sup>50</sup> 東大学生運動研究会前掲書、140 頁。

<sup>51</sup> 前掲書、138 頁。

<sup>52</sup> 前掲書、152 頁。

<sup>53</sup> 前掲書、143 頁。

れにしても、ここで個と大衆組織とは両立しうるのだろうか。個が大衆組織に加わったとして、大衆に埋没せずに社会的位置とゾレンに覚醒できるのか、またそうして覚醒した個は大衆から遊離してしまうのではあるまいか。前衛と大衆という旧来の図式からすると、意識が覚醒した個が前衛として大衆を操縦するという関係が頭に浮かぶ。しかしこの時期には、廣松はこれらを精緻に理論化するには至っておらず、「前衛が思想的に学生大衆を把握していくならば、必ずや学生大衆はプロレタリア民族主義に高まっていくだろう」<sup>54</sup>と述べているように、運動を外から見る観察者としての立ち位置にとどまっている。

### 3. 新左翼運動の理論家へ

1956年に『日本の学生運動』で勇ましく理論を掲げた廣松は、その後7年間、表だった言説を発表せず沈黙を守っている。その間の廣松の動きを追っていく。

『日本の学生運動』の絶版要求をされたさい、事態に收拾をつけるために廣松は共産党を脱退している。そして、1958年12月10日に、安保闘争を領導することになる「共産主義者同盟」（ブント）が結成されるが、廣松は参加を見合わせている。熊野純彦によれば、「ただ、まちがいなく推測しうることは、廣松は五十八年時点では、共産党の党内闘争をなお継続する可能性の側に、運動としての正統性をみとめていたであろうことが挙げられる」という。<sup>55</sup>

1960年の安保闘争当時には、廣松は全学連主流派と行動をともにしながら、ブント系の研究会「理論集団」に参加している。次に廣松が言説を発表するのは、1963年11月20日の「学生運動の現在に思う 討論会を司会して」『東京大学新聞』であり、十数回の連載「学生運動の軌跡」に寄稿している。その後、「学生運動の軌跡」で編集部からの要望を受け、「隠遁」した理由を次のように述べている。

スターリン理論やフルシチョフ路線、遑ればロシアマルクス主義に対する懐疑的批判と、他方における国際派理論（レーニン・スターリン教条主義）とのギャップが

---

<sup>54</sup> 前掲書、121頁。

<sup>55</sup> 熊野前掲書、76頁。

もはや弥縫できなくなったこと、そしてこのギャップを解決すべく根本的にデンゲンするための落ち着いた時間を必要としたこと、究極的にいえば“隠遁”の理由はここにあったのである。<sup>56</sup>

もっとも、「“隠遁”には複雑な事情がから<sup>ママ</sup>にでおり、まだ今日では、それを洗いざらいにすることは憚られる。」<sup>57</sup>と述べていることから、廣松が沈黙した理由を完全に知ることはできないが、思想を熟成させる道を自覚的にとったとみなしてよいだろう。

ここには、六全協で旧国際派に学生が流れて来たと察すれば運動理論の執筆に注力し、ブント立ち上げという運動の昂揚期には隠遁して理論の精査に励むというように、実践的な学生運動と自身の理論形成とを意識的に切り分けている廣松の姿を見ることができる。

それでは次に、1960年代以降、廣松が新左翼運動にどのようにコミットしているのかをみていきたい。

廣松は、高校時代まで過ごした九州ですでに共産党に入党しており、旧左翼での活動をへて新左翼運動を支持するに至っている。そして、1964年に社会主義研究会名義で匿名出版した『現代資本主義論への一視角』末尾でこう述べている。

しかも新左翼の了解するところでは、これは単なる予料の相違ではなく、新左翼的志向が大衆化し、物質的な力となることなくしては、そもそも世界革命、その環たる先進国革命は不可能なのである。この故に、如上の相違は単なる理論問題ではなくすぐれて実践的問題であり、革命の達成を志向する者にとっては、旧左翼がかかると実践を回避し、体制に内在的な運動をつづけ革命的な大衆斗争に対する事実上の妨害者として存立する限りでは断じてこれと袂を分かち、自ら旧左翼の晶<sup>58</sup>を摩さざるをえない処である。ここに新左翼が新左翼として存在する理由が存する。<sup>59</sup>

---

<sup>56</sup> 廣松渉「ブント形成の底流(上)」『東京大学新聞』1964年6月24日付。

<sup>57</sup> 同上。

<sup>58</sup> 判読難。

<sup>59</sup> 社会主義研究会『改訂増補版 現代資本主義への一視角—中ソ両派との批判的対質のために—』(レボルチオン社、1964年)、91頁。

こうして廣松は、旧左翼と決然と袂を分かち、新左翼の活動家としての意志を表明したのである。もっとも、その後も旧左翼として想定している共産党との接触を完全に断ったわけではなく、共産党の動きを見ながら新左翼を擁護するというスタンスを取り続けたことは、熊野純彦による評伝で次のように述べられている。「廣松が、とはいえ、おそらく終生、いくつかのルートをかいて日本共産党内部の情報につうじ、その動向に注意をはらいつづけていたことはまちがいない。さき書きとめた「長電話」のおりも、党の幹部会における某々氏の発言について廣松は言及し、共産党の現況についての廣松解釈にしばらく付きあわされたものである。」<sup>60</sup>

その後廣松は、1969年から数年のうちに新左翼に関する論考を矢継ぎ早に世に問うている。「『新左翼』運動の思想的位相—マルクス主義運動の現局面—」（『中央公論』1969年9月）、「東大闘争の現代史的意義」（『朝日ジャーナル』1970年1月）、「新左翼革命論の問題状況—大衆叛乱型革命路線の模索—」（『現代の眼』1970年2月）、「座談会 新左翼思想と「主体性」」（『現代の眼』1970年5月）、「新左翼の思想と行動」（『人間として』1970年12月）、「新左翼の思想—その位相、基盤、指向—」（『理想』1970年12月）、「大衆運動の物象化と前衛の問題」（『京都大学新聞』1970年12月6日）、「ニュー・レフトの思想的境位」（『現代思想』1973年9月）というように、それらは多様な媒体で発表されている。

廣松は、資本主義社会体制に対するアンチテーゼとしての社会主義運動は「マルクス主義」の時代とそれ以前の「前マルクス主義」の時代に大きく分けられ、新左翼は「マルクス主義」の時代につづく第三の時代の到来を予兆するものであると見ている。「マルクス主義」の時代の労働者の叛乱が、「労働者階級の公民権要求」の運動であったように、スチューデント・パワーやフランスの5月革命など、先進資本主義諸国で爆発した叛乱が新左翼時代の幕開けであった。廣松によれば、既成左翼は「実践的に全くの体制内存在に墮して了っている」だけでなく、既成「マルクス主義」では、「新しい歴史的胎動の指向性」を「思想的に対自化できない」という。つまり、旧左翼の内部からはもはや歴史を駆動する契機は生じえない。そこで「歴史的胎動の実践的・思想的体現者として登場したもの、

---

<sup>60</sup> 熊野、前掲書、77頁。

それが新左翼にほかならない」という。<sup>61</sup> さらに新左翼の特徴として、「管理体系に内存在する自己の在り方が、さしあたり、耐えがたい“人間喪失,”“人間疎外,”として意識され、自律性の志向となって現われる」と廣松は述べる。<sup>62</sup> それでは、こうした認識を持っている廣松が、新左翼に期待するものとはいかなるものであったのだろうか。それにはまず、廣松が考える新左翼の系譜を見ておく必要があるだろう。

廣松の整理によれば、日本の新左翼には、三つの思想的・組織的系譜があるという。それはすなわち、「革命的共産主義者同盟」の系譜（革共同系）、「共産主義者同盟」の系譜（ブント系）、構造改革派出自の系譜（構改系）である。「共産主義者同盟」と「構造改革派系」は出自を同じくし、1948年9月に全日本学生自治会総連合として結成されるが、所感派と国際派との対立を経て1958年6月に日本共産党本部で対立し分裂している。また、「革命的共産主義者同盟」は1957年に結成された「日本トロツキスト連盟」に根を持っている。<sup>63</sup> ここで廣松が重要視するのは、ブントと構改諸派との革命路線が収斂してきていることだという。1950年代の末から60年にかけて、ブントと日共系構改派との間で行われた論戦は、中ソ論争を先取りするものであり、構改系論客がソ連の論陣を張った一方、第一次ブントの主張は、レーニン主義の革命路線そのままであったという。この構図を見て廣松は、「あくまでもこのかぎりでの話であるが、第一次ブントと構改派との対立は、中ソ論争における革命路線という側面での対立と酷似するものであった」と述べている。<sup>64</sup> このように、新旧左翼を含め様々な党やセクトが分裂・統合をくり返し、混迷した時期に、廣松は新左翼の理論家として現われたのだった。次章では、『日本の学生運動』（1956年刊）で問題とされていた前衛と大衆について、新左翼理論家を宣言した廣松がどのように考えていたのかを見ていきたい。

#### 4. 前衛と大衆

新左翼の理論家として登場した廣松が対象としたのは、学園闘争の嵐が吹き荒れる頃の

---

<sup>61</sup> 廣松渉「新左翼の思想—その位相、基盤、指向—」『理想』（理想社、1970年12月）、4頁。

<sup>62</sup> 同上、6頁。

<sup>63</sup> 小熊前掲書、233頁。

<sup>64</sup> 廣松渉「新左翼革命論の問題状況—大衆叛乱型革命路線の模索—」『現代の眼』（現代評論社、1970年2月）、64頁。



学生たちであった。『日本の学生運動』に見られた廣松の思想は、学生という立場を超え教員としてかかわった名大紛争<sup>65</sup>において、また違った様相を呈するようになる。

大学当局・評議会の管理者的体質を突きくずさなければならぬと立ち上がった学生達の大衆団交・占拠・バリケード・ストライキを支持し、廣松は次のように述べている。

彼ら学生が問題にしているのは、まさしく代議制民主主義の理念とルールそのものの虚偽性であり、彼らが偉大なる歴史的事業は少数者の断固とした決起によってはじめて血路が開かれるという経験則に立脚していることはおくにしても、彼らの路線は決して“若き狂人の浅知恵,,どころではなく、思想史的にみて有力にある思想体系にもとづくものである。<sup>66</sup>

廣松自身、「代議制民主主義が本源的にフィクションである」<sup>67</sup>とし、学生たちと近い思想的立場から、名大紛争を支持したのだった。

しかし、それから約1年後、「名大に居づらくなったわけではない。ただ、教官は所詮管理者。学生の行動に理解を持っていたとしてもいっしょに戦うわけにはいかなかった」<sup>68</sup>と述べ、1970年4月1日付けで名古屋大学を退職している。学生活動家として『日本の学生』を著したさいには、自覚的な「先進的部分」が学生層を覚醒させることを主張したが、名大紛争において学生層の外部にありながら学生を支持することの矛盾に廣松は、自ら終止符を打ったのである。

その後廣松は、1976年4月に東京大学教養学部助教授に就任するまで浪人生活を余儀なくされるが、一般誌での執筆や主著の系列に属する『世界の共同主観的存在構造』(1972

---

<sup>65</sup> 名大紛争とは、1969年5月23日、名大教養部ストライキ実行委員会、理学部共闘、医学部、法学部、文学部その他の“学生協議会,,など学生自治会執行部に対する批判的勢力が、大学立法粉碎・評議会見解撤回等六項目を要求して教養部をバリケード封鎖したことを指す。大学当局は、代議制民主主義の手続きをふんで選出された評議会との交渉には応ずるが、ストライキを行った“暴力,,学生は相手にしなかった。「名大紛争,,の焦点 学生は何を突きつけているか」『毎日新聞』1969年6月11日付夕刊、及び『資料・戦後学生運動 別巻』(三一書房、1969年)、254頁参照。

<sup>66</sup> 「“名大紛争,,の焦点 学生は何を突きつけているか」『毎日新聞』1969年6月11日付夕刊。

<sup>67</sup> 同上。

<sup>68</sup> “教官としての限界感じた,,一広松助教授、名大を去る」『朝日新聞』1970年4月1日付夕刊名古屋版。

年刊)『事的世界観への前哨』(1975 年刊)をはじめとした単著 10 冊の刊行など旺盛な執筆活動を見せている。このように、理論家としての対象が学生層から拡大しつつあった時期、1970 年 12 月に行われた座談会で、文章表現について次のように批判されている。

これは広松さんご自身の内面を付度するわけじゃないのですが、全共闘各セクトの場合は、二つの意味があると思うのです。というのは、一つは自分の思想が大衆化できないという自信のなさと同時に、自分の思想の高貴性を誇るというか、裏返しの独善性、そういう否定的な意味だけしか感じられないのです。だから端的にうかがいますと、もしも広松さんがご自身の主張に客観性があるというか、みんなが同じ思想をもつべきであるとお思いになるのだったら、私は、こういう難解な文章というのは、当然避けてしかるべきじゃないかと……。<sup>69</sup>

これに対して廣松は、自身の「思想的な未熟さにも淵源していると思う」と譲歩しつつ、やさしく書きさえすればいいということになると「大衆蔑視」になりかねないと反論している。<sup>70</sup>

そして 1970 年 12 月には、前衛と大衆という図式をテーマとして論じた「大衆運動の物象化と前衛の問題」<sup>71</sup> で次のように述べている。

プロレタリア革命の前衛は「階級闘争を廃絶すべく階級闘争を戦い、政治を止揚すべく政治に挺身するという矛盾」を生き、前衛—大衆という構図を廃棄すべく、従って、前衛の存在を止揚すべく存在するという「自己矛盾的存在」として、自己否定を自己の存在規定とするわけであるが、この前衛の自己否定、前衛組織—大衆という構図の実践的止揚は、決して啓蒙による同心円的拡大を通じての大衆の消尽によってではなく、マルクス・エンゲルスの構想したごとき仕方での、即時的協働の政治力学への、前衛的集団の主体的アンガージュマンを通じて実現される。

---

<sup>69</sup> 小田実、開高健、柴田翔、廣松渉、真継伸彦「新左翼の思想と行動」『人間として』(筑摩書房、1970 年 12 月)、68 頁、真継伸彦の発言。

<sup>70</sup> 前掲書、70 頁。

<sup>71</sup> 『京都大学新聞』1970 年 12 月 7 日付。

革命という大衆的な対自的協働、協働の対自的組織化の地平は、前衛集団の不断の自己手段化的・自己否定化的な投企という構造内的契機を対自的能動因としつつ物象化された協働の弁証法的展開を通ずることによってのみ、はじめて現実のものとなる。

すなわち、廣松は、前衛が大衆を啓蒙していくといったことを意図しているわけではなく、前衛が自身の立場を自覚し革命に「主体的」に「アンガージュマン」していくことが、歴史を駆動することになると主張しているのである。ここで、前衛と大衆は二律背反の関係にあるが、理論的にはこの対立は解消できない。というのも、双方の体制（パラダイム）は別の基準をもっており、前衛の体制（パラダイム）の基準を大衆に適用することはできないからである。1983年に初版が出された『物象化論の構図』では、学生大衆という文脈からは離れてはいるが、こうした二律背反を止揚するものとして「ゲヴァルト」すなわち理論外的な実践的決着を俟つほかはないという。そしてそれを遂行するのは「超越的第三者」ではなく、二律背反の一方の当事者であると廣松は断言する。

単なる理論体系の埒内では真理の此岸性は確証されない以上、マルクスの全体系は実践を俟って完結する。体系的叙述＝体系的批判としての物象化論の理論体系は、論理的にはアンチノミーを、歴史的には物象化された相で“自己運動,,する体制内の矛盾の激成を、見定め、この帰結的事態を意識的・事実的な興発的・舞台的条件として、当事主体たちが体制そのものを止揚する運動へとむかう「蠢き」の“物象化的,,また“拘束的,,な必然性を確認したところで、実践論・革命論へと開く。それは“絶対知論,,で自己完結的に閉じるのではなく、まさに、「実践」へと開かれた理論体系をなすのである。<sup>72</sup>

こうした構造を理論的・思想的に把握しえた当事者の実践によってはじめて可能になるというのである。理論と実践を切り離し、どちらか一方に優位性を置くのではなく、「実践」へと移行することを前提とした形で理論体系が作られている。その真理性を体制（パラダイム）内部にある当事者の立場から解明しえた者が実践に移ることによってのみ、二律背

---

<sup>72</sup> 廣松渉『物象化論の構図』（岩波書店、2001年）、166頁。

反は止揚されうるといふ。たとえば、資本主義社会にある当事者にとっては貨幣には購買力という物象化した力が備わっているように見え、国家には人々を強制する力があるように見える。「貨幣の力」や「国家権力」という物象化された力は、そのものを物のように廃止することは不可能であつて、当の物象化を成り立たせている社会的関係を生産の場で抜本的に再編することなしには廃止できないと廣松は述べる。そして、資本主義的生産関係そのものを止揚するために、マルクス・エンゲルスが歴史的未來像として掲げる社会編制が共産主義社会であつた。<sup>73</sup>

おわりに

これまで、廣松渉の理論家としての思想形成について考察してきたことで、廣松の運動を巡る動向が明らかになった。そこで重要なのは、廣松が、現実の實踐的活動すなわち学生運動に直面しながら、それに直接はたらきかけるような運動理論や言説を發表していたことである。そして、運動の前面に出てくるともあれば、他方で完全なる沈黙を守ることもあった。

一貫してみられるのは、廣松が度々引用する「理論が大衆をつかめば物質的力となる」というマルクスのことば通り、理論を論じる場合でも変革への意志が色濃く出ているということである。そこには、革命的民族運動を平和運動よりも上位におき、闘争を煽る過激な主張も見られる。『日本の学生運動』（1956年刊）では、「理論戦線は政治戦略に従属するものである」<sup>74</sup>と述べ、理論のみに沈潜する学生を「勉強の自己目的化」といさめ、層としての学生を動員するための理論形成を行っていた。そして、その実践と理論との緊張が保てなくなるや表舞台から姿を消し、思想を練り上げるために沈黙することとなつたのである。

廣松は、前衛と大衆という二項対立を止揚し体制を変革するために、実践へと開かれた理論の構築をめざしていた。反体制の思想を確立するには、体制（パラダイム）自体を変革しなければならない。体制（パラダイム）に内在した理論家が、新たな体制（パラダイム）を構想し實踐的に實現することによってはじめて、二律背反を止揚できるのである。

---

<sup>73</sup> 前掲書、167～168頁。

<sup>74</sup> 東大学生運動研究会前掲書、146頁。

そこで理論家としての自覚は体制の「外部」から与えられるのではなく、あくまでも自律的に勝ち取るしかない。

だが、前衛と大衆という図式をしりぞけるということを表向きは装いながらも、前衛の自己批判に委ねているのみで、投げおかれた主体が体制内でどのように位置づけられるのか等閑に付されているようにも思われる。廣松は、前衛として大衆をつかむのは誰なのか具体的には述べていない。自らたちあがった者は、そう宿命づけられていたのか。変革を志す前衛の自己意識は体制の「内部」からどのようにあらわれてくるのだろうか。

変遷を遂げていく体制や構造の歴史のただなかで、個人はどのようにしてその構造の変転に働きかけることができるのかが今後問題とされねばならない。